

小島烏水全集

第五卷

小島烏水全集

第五卷

大修館書店

小島烏水全集 第五卷 (第四回配本)

定價八八〇〇圓

昭和五十五年五月二十日印刷
昭和五十五年五月三十日發行

著 者 小島 烏 水

發行者 鈴木 敏 夫

印刷者 青 木 勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三十二四
電話〇三(二九四)三三二一(代表)
〒一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

第五卷 目次

日本山水論

緒言

第一章 山水の意義

第二章 日本山嶽美論

一 山の繪畫的容貌

二 山の詩的生殖

三 山の科學的結合

四 山の歷史的祕庫

五 山の時間並空間的統計

六 山と人文の交渉

第三章 登山論

一 山の引力

- 二 登山は青年壯年の時代に限らる
- 三 登山は体力を養ふ
- 四 登山は志を大にす
- 五 登山は冒險の氣象を養ふ
- 六 登山は耐忍力を養ふ
- 七 登山は人の思慮を周密にす
- 八 登山は自然と親しむ
- 九 登山は同心協力を教ふ
- 十 登山は學術研究に資す
- 十一 登山は自我を脱す
- 十二 登山と長壽の關係
- 十三 登山は天然人事の本末的關係を知る
- 十四 登山と文章

第四章 日本山系概論

- 其一 千島及北海道の山嶽

アイヌ語のヌブリ

本邦殊に北海道の深山幽谷を跋涉したる奇僧圓空

四 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

其二 東北及關東の山嶽

其三 中央大山系

甲斐山嶽論

風流文人傳

其四 近畿中國の山嶽

其五 四國九州の山嶽

其六 日本の名山

第五章 登山準備論

一 登山の時季

二 服 裝

三 携帶品

四 天 幕

五 山中の假家

六 飲料水

七 食 料

八 天候の注意

九 山頂の注意

八四

八九

一〇七

一一一

一二八

一三三

一三六

一三九

一三三

一三八

一三九

一四三

一四四

一四一

一四六

一四八

一四九

十 登山雜記

二五

第六章 山と紫色

二五

第七章 裾野及湖沼

二六

湖心記

二七

第八章 日本の高山深谷を跋涉したる外國人及び其紀行

二五

第九章 森林美論

二六

第十章 日本山嶽の生物

二六

第十一章 谿谷の美

二七

第十二章 溪谷の四季

二七

第十三章 木曾の溪谷

二七

第十四章 雜記

二八

一 不二山

二八

二 愛鷹山

二五

三 不二の敍景

二五

四 美濃惠那山

二五

五 農男

二五

六 俗謠

二五

七 北日本の代表的植物

二六

八 芭蕉と東北

二六

九 ホキといふ地名

二六

十 暮春雜筆

二六

不二山の繪畫に就きて

三三

不二山と淺間山

三五

日本アルプスなる名稱

三五

日本北アルプス登山談

三六

山を讀する文

三六

紀行文論

三七〇

紀行文續論

三九〇

晩秋の自然と風景畫

三九

芒の美

四二

川の美感

四六

登山に就きて

登山に就きて

四三

讀書日記

四六

日本山嶽譜

四三

高山の特色

四六

『大日本地誌』第三卷を読む

四七

本年の登山

四八

本年の登山談

四九

登山凍死學生傳

五〇

「日本山嶽美論」に就きて

五一

『日本山水論』第三版序

五二

『日本山嶽志』の撰修に就きて

五三

『日本山嶽志』増補文

五八

解題・解説

近藤信行

六五

小島烏水全集
第五卷

日本山水論

恩師美澤進先生に獻ず

緒言

日本山水論は、余が數年來の宿構にして、今その一部分の論稿を、世に問ふを得たるは、余の悦ぶところなり。

余は本篇に於て、主として日本山水の汎論、併せて余が山嶽谿谷を愛する理由、及び感情を述ぶることに努めたり、或は好むところに倣せる一家言として、斥けられむも、余は終始自然研究の闡域を、外に跨ぐこと一步ならざりしを信じて、竊に自ら慰むるなり、今本書の刊行に當り、友人武田久吉氏が植物標本を、高野鷹藏氏が、蝴蝶標本及び右に關する材料を、貸與せられたるを徳とす、二氏年齒少うして、きはめて篤學の士、居常余の二氏に負ふところ多し、初め本書に高山生の植物、及び同蝶類圖を加へむとするに當り、時は四月にして生本を獲るに由なく、特に高山植物の如きは、本邦に之を記する書絶えて無く、憑據するところを知らざりしを以て、佛人シュローテル氏著 *Alpen Flora* 載するところの彩畫を粉本とし、アルプス山及び本邦高山に同生する植物九種を任意に選び、畫家芳野尙方氏を煩らはして、之を寫したれど、本邦產の物と、彼とは往々小異あるを以て、更に武田氏所藏の標本を乞ひ得て、訂正するところありたれど、素と腊葉より生色の眞を模す能はず、故にもし畫に到らざるところあらば、そは全く余が不用意の罪のみ、且尙方

氏が數ば苦心の畫稿を改作し、余の辛勞一半を頒たれたるを謝す。

卷中收むるところの畫版中、甲斐白峰、上野白根火山の二圖は『日本アルプス』著者ウオルター・ウエストン氏の余に贈られたるものにして、高妻山、白馬連山、及び同大雪田の三圖は、長野中學校教授、志村寛氏の親しく撮影せられたる傑品、木版圖は余のおぼつかなきスケッチに加へて、武田久吉氏、山崎紫紅氏の寫生圖を、畫家の改描したるものに係はる、余は以上の諸氏より厚意の賜を佩びたるを榮とし、特に掲げて茲に感謝を表す。

三十八年六月

横濱山王臺にて

著 者 識

第一章 山水の意義

山水の語、素と支那より來る、支那は大平原國なりと雖も、山的地方も是れあり、（揚子江の上流なる雲南、四川、貴州、三省の如き）且つ平原國なるを以て、却つて山水を奇とし、詩文に繪畫に、之を嗟咏するの風あり、然れどもその所謂山水の水には、海を含まざることを知らざる可らず、海を配したるときは、山水と言はずして山海と呼ぶ、經に山海經を以て名くるあり、蓋し支那海岸線の延長は、その揚子江域を算入すれば、必ずしも日本に比して、太だ短しと言ふ可らざるも、之を國土の面積と比例するに至つて、日本の匹にあらざるを覺ゆ、即ち日本にては三方里餘に對して一里の海岸線を有すれども、支那にては假令滿洲を除くとも、猶面積日本に十倍するを以て、隨ひて海岸線も僅に日本の十分の一に該當し得るに過ぎず、且つ日本の國土幅員狹長なるを以て、假令虛空を泳ぐ高波の如き、山谷の底に生活する信濃飛驒の遐陬僻邑人士を以てするも、徒步して海岸に出づるには、四日以上を費すことある可らず、然れども支那にては、海岸東南に偏在せるが故、一月を経て猶且達せざる處あり、その平野の廣濶渺茫は、水平的單調を作して、大陸的地貌の好標本、地平線と天空線と合一するところ、日本に見る水の如き一碧を畫するにあらずして、